

ラビンイスラエル首相

大津 隆文

過日新聞で、2021年の日本の対イスラエル投資は約29億ドル、前年比約3倍、海外から同国への投資額全体の16%を占めたと報じられた。その記事で思い出したのは、1994年、当時のラビン首相が来日し、滞在中イスラエルへの投資を勧誘するため開催した日本の証券界との懇談会。

当時証券界で禄を食んでいた小生は懇談会に出席、首相と言葉は交わさなかったが握手の栄には浴した。その瞬間オーラというか、命をかけて国政に当たっている政治家の迫力を感じた。

翌95年、ラビン首相が暗殺されたとのニュースに接し大きな衝撃を受けた。氏は長年に亘るパレスチナとの紛争を解決し平和的に共存するため、93年にアラファト代表とオスロ合意調印の歴史的偉業を成し遂げた（ノーベル平和賞を受賞）。これに反発した同胞ユダヤ人青年の凶行だった。以後歴史の歯車は逆回転し、紛争は泥沼化している。

首相直々の投資勧誘ではあったが、イスラエルは遠方で、政治的にも色々難しい問題を抱えているので、簡単には増加しないだろうというのが当時の正直な感想だった。それがこのように大きく増加しているとのニュースに接し嬉しくなった。今やイスラエルはサイバー、宇宙、医療等の分野で世界の先端を走っているようだ。

昔ニューヨークに二度住んだが、二度ともジェイジェイ（J-town）と密かに呼ばれていた地域で、ユダヤ人と日本人が多かった。日本人駐在員は子供の教育環境を重視するが、私立は授業料が高いので公立学校の評判のいい所を探す。すると大抵ユダヤ人の多い居住区になるのだった。またユダヤ人は日本からの転入者を抵抗なく受け入れてくれた。教育熱心という点では共通点が大きかったのであろう。

近年イスラエルではハイテク分野の発展が目覚ましく、ベンチャー企業も次々と設立されているようだ。日本は先を越されているのではないかと焦りすら覚える。国の存亡が常にリスクにさらされているという危機感の有無が背景にあるのだろうか。